

# いしざわだてあと 石沢館跡の発掘調査

令和2年12月から令和3年1月にかけて、大宮地域石沢地区で店舗建設工事に伴う石沢館跡の発掘調査を行いました。今回の発掘調査は、常陸大宮市内における最初の本格的な中世城館の調査となり、中世の屋敷跡が確認されましたので、その成果を紹介します。



写真1 発掘調査地の全景（写真中央が発掘調査地 写真左奥が常陸大宮市役所）

## ●石沢館跡の発見とその役割

石沢館跡は、那珂川と玉川に挟まれた大宮台地の西縁部に立地しています。平成28年、石沢館跡の西にある石沢台遺跡の第3次発掘調査で中世の堀跡が確認され、その堀が後の現地調査で大きな区画となることが判明したため、その範囲が石沢館跡として登録されました。

石沢館跡の役割は、台地の東縁部に連なるように立地する部垂城、宇留野城、前小屋城の3城から小場方面へ向かう街道が城域内を通るように築城されていることから、宿場町であった部垂宿の西の出入口を抑える関所城であったと考えられています。

石沢館跡の館主は、佐竹氏の家臣団「部垂衆」の構成員である石沢氏と考えられます。石沢氏については、弘治3年（1557）の「甲神社奉加帳」の中に「石沢宮内小輔」という名前が見られるほか、最近の調査では、神社の造営などに関わる「番匠」（大工）として石沢氏の名前を確認しています。また、石沢館跡の南西側には嘉禄元年（1225）創建の常弘寺が位置しており、何らかの関係があったと想定されます。

## ●調査の成果

発掘調査の結果、堀1条、掘立柱建物跡2棟、方形竪穴遺構8基、地下式坑2基、土坑33基、ピット37基の遺構が確認されました。その中の、堀・掘立柱建物跡・方形竪穴遺構が今回の調査の中心で、主に調査地の北部にまとまりを持って確認されました。

堀は、上端幅2.3m、深さ0.8m、断面形が逆台形となるもので、堀の底面近くから土師質土器の皿と内耳鍋の破片が出土しています。堀が造られた時期は15世紀後半で、防御をするための土塁を伴っていないことから、堀の機能は土地を区画するためのものと考えられます。

掘立柱建物跡は、2棟ともに東西に長く、主軸は堀の方向とほぼ一致しています。調査地の北西側に位置する第1号掘立柱建物跡は、桁行6間以上、梁行2間で、北と南の2面に庇が付く大型の建物で、主屋と考えられます。（1間は約1.8m）



写真2 堀の近景



写真3 第1号掘立柱建物跡の全景

方形竪穴遺構は、平面形が長方形で、長軸が2.5m以上ある遺構で、壁下に壁の基礎部と考えられる小溝が巡ることから、半地下式の小建物と考えられています。

出土遺物としては、土師質土器の皿と内耳鍋の他、瀬戸美濃天目茶碗片や志野皿片があります。時期は、15世紀後半から17世紀前葉にかけてで、主に中世後半のいわゆる戦国時代のものとなります。



写真4 方形竪穴遺構の全景



写真5 出土した遺物

今回の発掘調査で確認された堀や掘立柱建物跡等の性格については、堀に防御のための土塁を伴わないこと、掘立柱建物跡とともに半地下式の小建物と考えられる方形竪穴遺構が伴うこと、貿易陶磁器の出土がなく、土師質土器皿も大量に出土していないことから、館跡の中心部の施設ではなく、石沢館外縁部の施設と考えられます。特に、主屋と考えられる第1号掘立柱建物跡の機能としては、石沢氏の家臣屋敷、街道の関所施設、街道沿いに営まれた商工業者の屋敷等が想定されます。

今回の発掘調査では、たくさんの方々にご協力いただきました。今後とも地域の文化の礎を守る埋蔵文化財行政にご理解とご協力をお願いいたします。